中里介山全集

第十八卷

筑摩書房

中里介山全集第十八巻
昭和四十六年十二月二十二日発行

著者　中里介山

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八
竹之内静雄

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号　一〇一—九一
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京四一二三
印刷　株式会社厚徳社
製本　株式会社矢島製本所

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0395 (製品) 71718 (出版社) 4604

目次

日本武術神妙記　5
続日本武術神妙記　149
遊於処々　231
旅と人生　369
解説（樋口謹一）　397

函·装画·横山大觀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作品集（六）

第十八巻

日本武術神妙記

序文

これは御覧の通り日本武術の名人の逸話集である、創作ではない、取敢えず著者所蔵本の一部分から忠実に抜き集め、それを最も読みよきように書き改めたまでであるから著というよりも編ということが、ふさわしいかも知れない、併しそれにしても相当の頭脳を使い取捨の労を加えたことに於いて必ずしも著作に劣らない労力を要した、そこで著と称しても僭越ではないと考えられる処がある。

ここに日本武術とはいうけれどもこれは所謂武術の「流派」というものが定まった時代から出発しているので、つまり足利の末、徳川の初期の間に筆を起して最近幕末明治にまで及んでいる。

本来日本は武術の天才国である、それは建国以来の国風であって、その間に箇人としても驚嘆すべき幾多の武術的天才を生んでいるが、武術というものが科学的組織に成功したのはこの「流派時代」に始まるといってよろしい、それまでの武術は特に個々の天才が秀出したり或は武術というものが戦争の一つの附属芸術に過ぎなかったものを、この期に至って個人武として立派に独立した一つの科学とし芸術としたものである、通常飯篠長威斎の天真正伝神道派をもって流派というものの起りとしているから本書に於てもそこから始めている。

右の初期に於ては個人武を総て兵法といっていた、後には兵法の学は軍隊運用学のようにとられて来たがその時代

は兵法が即ち個人武であってまた必ずしも剣術のみに限らず槍、薙刀、組打等すべて個人武を総称したもので一流一派とはいうけれども初期の人は刀槍その他皆これに兼ね熟していた、また兵法という語の外に芸術という文字も武芸に対して用いられた、今日でこそ芸術という文字は不良文士の専売のようになったが、もとは日本武術の称呼の一つであった、この流派時代の初期は同時にまた日本武術の黄金時代であって、この間に輩出した流祖名人の芸術は真に超人的の神妙を極め得たりといいつべきであった。

それから徳川氏の泰平時代、この祖流は或いは本流は或いは支流となり或いは別派を起し、綿々として二百数十年続き来ったが、その間に広くなり浅くなり、繊巧に堕した弊はあるけれども曾て失墜廃棄されたことはなく、殊に諸武術のうちの主流をなす剣術の如きは徳川中期に於て二百余流、末期に於て五百余流を数えらるるに至った、世界の何れの国にも武術が斯くの如く科学的に而も統制的に普遍的に発達存続せしめられた国は無い。

日本武術を知らなければ日本国民性を理解する事は出来ない、これを剣道の側より見るも、各流儀それぞれ皆特色はあるが、通じて観る処の日本の剣法は我を護ることを先とせずして我を殺すことを先とする、西洋のフェンシングの如きは刀を片手に執り、身を引けるだけ引き、最も多く我が身を護りながら最も多く敵を傷つけようという防禦的経済の理法に出でているが、日本の剣法は、刀を双手に取って全身全力全精神をもって敵にぶっつかって行くのである、そうして死中に活を求むるという超経済の方法に出でている、これは、仏教のうちの禅の宗旨とよく合致した手段である、だから日本の剣法には本来受けるという手はないのであって、討つか討たれるかという二つの端的よりほかはないのである、そこで剣法の勝負は必ず相打である——ということが古流剣法の極意になっている、相打とはいいながら、その深浅精粗が問題なのである、皮を切らせて肉を斬れ、肉を斬らせて骨を斬れ、骨を斬らせて髄を斬れ、と柳生流（江戸将軍の師範なりし剣法）では云う、全く死中に飛び込んで活殺の自在を得るのである、その勝負はオールかナッシングか生か死かの決定的のものである。

その時代から少し下って、漸く稽古に道具をつけるようになり、叩合いがはじまったけれども、本来受けつ流しつの叩合いなるものは一つの稽古に過ぎないので、剣法そのものは斬るか斬られるか、生きるか死ぬるかである、そこで、勝を一瞬に決する、生死を眼前に見詰めることが宗教の境地に達するのである。

そうして、その勝を一瞬に決する勝負の為に一生涯の修練を費して絶対無礙の世界を悠々自若として歩み得るというのが名人の境地なのである、この剣道の特色精神が、事ある毎に日本の国民性を発揮している、剣道と相並んで行なわれた柔術、或は柔道というものにもこの特色がよく見られる、それから、スポーツの一種としての日本の国技と

されている相撲に於いてもその特色がよく見られる、日本の相撲は西洋のレスリングやボクシングと違ってちょっと指を地に一本ついても、足を規定線外へちょっと踏み出しても、もうそれで勝負がついているのである、その代り、愈々取組むまでの計画と熟慮は非常に長い、それは日本のスポーツの立派な特色である。

日本の剣道に限らず、日本の武術はスポーツではない、近来軽薄なる記者が、是等をスポーツの中に組み入れているものがあるけれども、これは全然間違っている、日本の武術は国民性そのものの発現であり、一種の宗教である、人が和かい気分で、生活の余裕に人も楽しみ我れも楽しましむるスポーツの類と同一視する時は非常なる誤解であり堕落である、日本に於ける大きな仕事は皆この剣道の意気に於て為され、国難はいつもこの武道の精神によって排除せられた、これを言葉に現わして見ると、「熟慮断行」である。

日本国民性は熟慮の際には殆んど無表情にして多くの侮辱を忍んでいる、殆んど忍び難きところまで忍んでいるが、実行となると死そのものの中へ直接飛び込んで活を求める。

明治維新の如きも、歴史的には日本空前の文化的飛躍の時機であったけれども、それを為した人は皆剣道家であり或は剣道家的精神を具備したものであった、それから、明治二十七八年日清の役、三十七八年日露の役、皆この精神によっている、極度まで隠忍し、圧迫に堪え、その間に熟慮計画を樹て、而して万已み難き時に至って初めて断行する、近来、日本も種々の思想複雑し来り、この特殊の国民性にも大いに疑念を持たれたが、最近の満洲事変の前後の経路を見てこの国民性未だ衰えずということが出来る、例の爆弾三勇士の如きもこの国民性の一つの現われであった、日本国民自身がこの国民性を自ら認めず、或は曲解して自ら侮るようなことがあれば甚だ危ない、また、世界の国民が日本国民のこの国民性を看取し得ずして日本を侮ることあれば、これもまた危ない、この国民性は決してミリタリズム、或は侵略主義を含んではいないということを強調しなければならぬ、この天才的国民的特色を以て争闘性蛮力と見るものは剣道をスポーツと同一視するものの無智と同様である、日本の剣道の真精神を理解する者は、それが絶対に危険性が無く、却って危険を防止し、人間の正義の為に邪悪と闘い、士人の品格と体面と教養を豊かにするものであることを知らなければならぬ。

世界に於て、古来、日本国民ほど武器を愛する国民はなかった、日本国民の武器を愛好する態度は蛮力の表象として誇るのではない、破邪の正器として恭敬するのである、そこで、刀剣を作る鍛冶は斎戒沐浴し、神に祈り仏に仕うる心をもって刀剣を鍛えた、故に日本の刀剣は世界絶倫の利器である、武術の修行に於てもその通り、武術修行の処を道場といい、聖僧が道に精進するのと同じ意味のところとし、必ず神仏を祭り、また、その礼儀正しきこと武術家

の如きはない。

そこで、日本では少年時代より士分のものは申すまでもなく、農商の人々まで武術を学んだ、農夫のうちより一流一派の達人を出したのも少くはない、それから日本の古来有名なる武将は固より政治家も皆個人的に武術の達人であった、日本歴史を通じての最大政治家の一人と称すべき徳川家康の如きも武将としてのみでなく、単に剣道家として立たせても一流一派の祖たるべき実力を備えていた、また徳川後期の最も文化政治家である松平定信の如きも柔術の師範として、宗家を継ぐべき実力があった。

そこで、日本の剣法というものは生死の瀬戸際に立たなければ、その神妙がわからないものである、単に道具をつけて叩合いをしたり、勝負を争ったり、また演劇や映画の類によって、そんなものの俤を見ようとするのは大きな間違いである、日本の剣法を知るには日本の宗教の神秘に触れなければわからぬ。

本書記する処は、必ずしも珍書秘書を探ったというわけではなく、取り敢ず著者家蔵本の一部分から抜いたものであることは上述の如くだが、兎も角、右様な精神を以て比較的各方面に日本武術の精髄味を収録した点に於ては最も出色と云って宜かろうと思う、勿論、これ以上に伝らべきものにして、これに漏れたるも多いに相違ないと思うが、それは当然将来相当の続篇を以て集大成しなければならない、ただそれ集であるから必ずしも私見は加えない、諸書に見るうち多少の矛盾錯誤している処はあってもそれはその儘取り容れた、比較、考証等は別に研究書として着手すべき事である、本書の要領は日本武術の神妙の働きを想像感悟せしむるにあるのだから、もとの講談者流や、今日の大衆文学連の為すが如き荒唐妄誕と乱雑冒瀆とは極めてこれを避け引用の書物も皆相当信用権威あるものにより、間々稍荒唐に近き逸話と雖も精神修養にとって有益と思われるものは伝説のまま加えたものもある。

それから普通誤り易く紛れ易きもの流名人名等に就いても相当に訊して、まだ決して完全とはいえないが出来るだけは訂正して置いたつもりである。

さてまたこれ等神妙の名人上手の実力に就いての品評は古来よく下馬評にのぼり、炉辺話題に供せらるるものであるが、それはなかなか難かしいもので時代を異にし流派を異にする超人間の人々の技量手腕に上下段階を附して見るということは殆んど不可能のことだが、併し離れて大観すれば自ら相当の標準が無いではない、著者はいつか閑があったらば戯れにその番附を拵えて見たいと思っているが、まず初期に於て一例を云えば、

大家　上泉伊勢守
名人　柳生但馬守　塚原卜伝
上手　小野次郎右衛門　宮本武蔵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と謂ったような順位は動かないものと思われる。

宮本武蔵の強さに就いては問題になっていることは今に始まったことではなく渡辺幸庵の物語には武蔵は強さに於ては柳生但馬守よりも井目も強いと書いてあり、それからまた或書には柳生但馬守は宮本武蔵の弟子だなんぞと途方もない事も書いてあって強さに於いては日本無双と噂をされたことは随分古い話だが位地としてはこの辺の順序に坐るべきものだと思う、その他これに伯仲上下する名人上手を各藩各家に有していたことは本書によってもその一斑を窺い得らるると思う。

右の如く本書は一に古来の諸書に材料を得、それに取捨選択の労を加えて別に練って書き改めたものであるが、引用の書目は総て、各項の下に著者名或は原書名を記して置いた、また近刊の著書のうちよりも、相当許さるべき範囲内に於て借用摘録をさせていただいているが、本書の主意精神斯の如きものであるにより、一々御挨拶を申上げることの代りに、ここに一言を附して御寛恕を請う次第である。

著　者

天の巻

飯篠長威斎

飯篠長威斎は下総香取郡飯篠村の生れで香取神宮に参籠して妙をさとり、天真正伝神道流の一派を開いた、これが日本の剣道に流派というものの起った祖ということになっている。

松本備前守

松本備前守尚勝（あるいは杉本政信）は常陸の鹿島神宮の祝部である、塚原卜伝に伝えた「一の太刀」もこの人の発明だと云われる、塚原卜伝、上泉秀綱、有馬乾信などは、この人の門人であって、鹿島流というのは世間から見て唱えた名称で、鹿島の神宮の方では別に神流といっていたらしい。

中条兵庫助

中条流の祖、中条兵庫助長秀は代々剣術の家に生れ、

鎌倉の評定衆であり、足利将軍義満に召されてその師範となった、鎌倉寿福寺の僧慈音というものに就いて剣道を修めたということである。

この中条流からは多くの流儀を生み出している。

上泉伊勢守

新陰流の祖、上泉伊勢守信綱（綱の字を普通には縄に書くが、その家に伝わる処はこの綱の字だそうである）は先祖俵藤太秀郷より出て、代々上州大胡の城主であったが、信綱が父の憲綱の代に至って城を落されたということである、信綱は剣術を好み飯篠長意入道及び愛洲移香（移香の字を多く惟孝と書いているが、新陰流の古い免許状の記すところは移香である）に従って遂にその妙を極め信綱は上野箕輪の城主長野信濃守が旗本になり、度々の戦いに功あってこの家で十六人の槍と称せられた、中にも信濃守が同国安中の城主と合戦の時、槍を合せて上野の国一本槍という感状を貰ったことがある。

その後、甲州武田信玄に仕えて、この時から伊勢守と改めた、程なく武田家を辞して京都へのぼり光源院将軍（義輝）が東国寺に立て籠った時にお目見えをして軍監を賜り勝利の後天下を武者修行し、「兵法新陰軍法軍配天下第一」の高札を諸国にうち納め、その後禁裏へ父子共に参内し伊勢守従四位下武蔵守に任じ、子息は従五位下常陸介に任じて名を現わしたが、この信綱天下一の名人と称せられ、流を新陰と称した。

この流の秘歌に、

いづくにも心とまらば棲みかへよ
長らへばまた本の古郷

この流から出ずる剣術は甚だ多い、柳生但馬守宗厳も信綱が術を伝え、塚原卜伝もまた信綱に従って学んだものという。

（撃剣叢談）

上泉伊勢守は上州の人であって、新陰流の祖である、諸国修行の時に或村で多勢のものが民家を取り囲んで騒ぎ罵る処へ通りかかった。

「何事であるか」

と上泉が尋ねると、土地の人が、

「各人があって逃げながら子供を捕えて人質にとってしまいました、多勢のものが斯うして取り囲んではいるけれども下手をすればその子供が殺されてしまいますので、我々は手の出しようがなく子供の親達はああして嘆き悲しんで居ります」

という、上泉これを聞いて、

「然らば拙者がその子供を取り返してやろう」

といって、折から道を通りかかる一人の出家を呼んで云うことには、

「今、悪い奴が子供をとっ捕えて人質としているそうだが、

拙者は一つの謀をもってその子供を取り返してやりたいと存ずるに就いては貴僧を見かけてお頼みがござる、願わくば拙者のこの髪を剃って、貴僧の法衣を貸して貰いたい」

出家は直ちに承認して上泉の髪を剃ってやり、自分の法衣を脱いで上泉に与えた。

上泉がそこで、衣を着して坊さんになり済まし、握り飯を懐に入れて、咎人の隠れている家へ入って行った、咎人これを見ていう。

「やあ、来たな、必ず拙者に近寄ってはならんぞ」

上泉が曰く、

「別に愚僧は貴君を捉えようのなんのとの考えがあって来たのではござらぬ、ただ、御身が捕えている童がひもじかろうと思うから握り飯を持って来てやったばかりじゃ、少し手をゆるめて、その子供に握り飯を喰べさせるだけの余裕を与えてくれれば愚僧の幸いでござる、出家というものは慈悲をもって行とするが故に、通りかかってこの事を見過し、聞き流すわけには行かないのでござる」

といって懐中から握り飯を出して子供の方へ投げて与え、また握り飯を一つ出していうには、

「そなたもまた定めてひもじくなっておいでござろう、これなと食べて気を休めなさるがよい、わしは出家の身で、いずれにも害心はないのだから疑い召さるるなよ」

といってまた一つ咎人の方へ向けて握り飯を投げて与えた、咎人が手を延ばしてそれを取ろうとする処を飛びかかってその身をとって引き倒し、子供を奪って外へ出た。

村人がそこへ乱入して咎人を捕えて殺してしまった。

上泉はそこで法衣を脱いで、以前の出家に返すとその僧が非常に賞美していうには、

「まことにあなたは豪傑の士でござる、わしは出家であるけれども、その勇剛に感心しないわけに行かぬ、われ等の語でいえば実に剣刃上の一句を悟る人である」

といって、化羅を上泉に授けて行ってしまった。

上泉はそれからいつもこの化羅を秘蔵して身を離さなかったが、神後伊豆守というものが第一の弟子であった故にこれに授けたということである。

（本朝武芸小伝）

永禄六年、夏秋の頃上泉伊勢守は伊勢の国司、当時俗に「太の御所」と称ばれた北畠具教卿の邸に着いた、この具教は、塚原卜伝から「一の太刀」を伝えられた名人であって、その旗下には武芸者雲の如しと云われた、併しながら一人として上泉伊勢守の前に立つ者が無かった、そこで北畠卿は、

「これより大和の国へ向うと神戸の庄小柳生の城主、柳生但馬守宗厳というものがある、これは諸流の奥義を極めた人だが、中にも神鳥新十郎より新当流の奥義を伝えて五畿内一と称ばれている兵法者である、貴殿の相手に立つもの、この柳生を措いては外にないであろう」

そこで上泉伊勢守は北畠卿からの紹介を持って先ず南都の宝蔵坊に向った、この宝蔵坊には宝蔵院槍術の宗師として天下にかくれなき覚禅法印胤栄がいる、この人は柳生但馬守とは別懇の間柄で、但馬守と相談し、素槍に鎌をつけることを工夫発明した人である。

「太の御所」よりの紹介をもって上泉伊勢守が柳生と仕合せんが為にやって来たということで、胤栄は急使を馳せて柳生谷へその旨を伝えた。

柳生但馬守時に三十七歳、この年の正月二十七日には松永の手に属して多武の峯を攻めて武功を立て、壮心勃々たる折柄であった、上泉伊勢守来れりとの報を聞いて欣喜雀躍して奈良に来って伊勢守と立合うことになった。

ところが但馬守、伊勢守と仕合して、一度闘ってまず敗れ再び闘ってまた敗れた、而もその敗れ方たるや前後同一の手を以て同じ様に勝たれて了ったのである、そこで但馬守思うよう、同じ勝たれたるにしても負けるにしても、同じ手口で斯うまで手もなく打ち負けるということは心外至極である、よし今度は彼が手法を見極めんと専ら一心に工夫し、更に来三日の仕合となった処がまたしてももろくも前二度の仕合と同じことに、手もなく破られてしまった。

ここに於て伊勢守に全く帰依欽仰し節を屈し回国の途中である処の上泉伊勢守を屈請して、柳生の居城に招き、それより半年の間教えを受けて日夜惨澹たる工夫精進を重ねた。

南都の宝蔵院胤栄もまた柳生城に立ち越えて、共に上泉の門に入って学んだ、当時、上泉の伴にはその甥と伝えられる処の弟子疋田文五郎景兼があり、また鈴木意伯もあったが、その時上泉伊勢守は疋田文五郎に向って、

「お前にはこれから暇をやるによって、諸国を武者修行の上別に一流を立てるがよろしい」

といった、疋田は入道して栖雲斎と号し、後年肥後に於て、疋田陰流を立てて後世に残した。

柳生但馬守は斯くて半歳の間上泉伊勢守に就いて新陰の奥妙を伝え余すところなきに至った、そこで上泉伊勢守は一旦別れを告げる時に臨んで柳生但馬守に斯ういうことを云った。

「余は多年研究しているが、無刀にして勝を制するの術に未だ工夫が足らず、その理法を明らかにすることが出来ない、これのみぞ深き恨みである、貴殿はまだお年が若い、将来この道を明かにするものは恐らく天下に貴殿を措いてはその人が無いであろう、どうかこの事を成就して、末代までの誉れを立てていただきたい、ではいずれ、再会の時もござるであろう」

と暇を告げ再会を約して上泉伊勢守は柳生谷を発足し、中国西国の旅路についた。

柳生但馬守はこれより世に出でざること数年、従来の猛気を悉く抛却して、遂に上泉伊勢守が附嘱を開悟大成した。

永禄八年再び上泉伊勢守が柳生谷を訪れた時に但馬守は己れが開悟成就せる武道の深奥とその妙術を示した。

伊勢守はそれを歎称して曰く、
「今ぞ天下無双の剣である、我れも遂に君に及ばない」
と、いって一国一人に限れる印可状を授けて新陰の正統を柳生に譲り、かつ云う。
「以後は憚りなく、この一流兵法を柳生流と呼ばれるがよろしい」
ここに天下第一の者に推薦された、時は永禄八年卯月吉日これぞ柳生流の起元である。

（柳生厳長著「柳生流兵法と道統」）

上泉伊勢守が柳生へ行った時のことを或る一書には次の様に書いてある。
上泉伊勢守は虎伯という弟子（疋田文五郎のこと）を召連れて大和に行った、時に柳生氏は上方に於て兵法無類の上手であった、これ幸いと上泉と仕合を望んだ、上泉が、
「さ様でござらば、まず虎伯と立合い召されよ」
と自分は再三辞退した。
柳生はそこで、虎伯を相手に使ったが、虎伯が、
「それは悪い」
と三度びまで柳生を打った。
そこで、こんどは是非上泉と仕合を所望したので、上泉も辞退しかねて立合ったが向うと直ぐに、
「その太刀を取りますぞ」
といって奪い取ってしまった。
そこで、柳生が大いに驚いて三年まで上泉を止めて置いて新陰の秘伝を受け継いだ。

（武節雑記）

上泉伊勢守が、柳生の処から出て後、関東へ下るといって三州牛久保へ立寄った。
牛久保には、牧野氏三千石を知行していたが、その家臣に山本勘介があった、勘介はきよう流という兵法を遣って、恐らく敵はあるまいと自慢であった、弟子も数多くあったが、有名なる上泉師弟が来ると聞いて、おかしいことに思い、
「上泉とやらが来たならば、うちの先生に合せて思いきり打たせてやろう」
などといっていたが、さて牧野殿が上泉伊勢守と、弟子の虎伯と二人を招いて、
「うちに山本勘介という兵法の達者がいますから仕合をして貰いたい」
そこで、上泉は先ず例によって虎伯と仕合をさせた、虎伯は勘介に向って、
「それではあしいぞ」
と云って勘介を容易く打ち込んでしまった、勘介が立て直してまた立ち向うと、
「それにては取るぞ」
といってツト当って太刀を取ってしまった。
日頃勘介を憎いと思っていた者は、勘介が打たれた打た

れたといって評判をしたものだから勘介はそれを快からず思って暇をとって甲州に行ったということが事実の如何は知らず武辺叢書に書いてある。

（武辺叢書）

柳生宗厳

柳生宗厳は晩年或る事の為に人に怨まれその者は如何にもして宗厳を討ち果そうとしたが名にし負う名人のことであり、家臣も多いので手のつけようがなかった、宗厳或る時病気にかかり門弟二三人を連れて摂津の有馬の湯に行った、某はひそかにその後をつけて行き日夜宗厳の動静を窺っていたが或時宗厳ただ一人小刀を携えたままで宿屋の南の日当りのよい処に坐って愛養の隼鷹を拳の上に置いて余念なく可愛がっている、某はこれを見て、ここぞと思って刀の鞘を払って宗厳の頭上を目がけて斬りつけたが、その時早く宗厳は抜く手も見せず腰なる小刀を抜いて敵の急所に突き込んだので某はあえなくその場に斃れたが、その時宗厳の拳の上の隼鷹はもとのまま身動きもしなかったそうである。

柳生宗矩

徳川三代家光は若い時分から柳生但馬守宗矩に就いて剣術を学び、非常に優遇されていたが、世間の人は柳生はただ剣術だけで将軍家のお覚えがめでたいのだと皆思っていたが、その実は剣道によりて政治を教えて居られたものと見え、家光は常におそばの人に、

「天下の政治は但馬守に学んで我れはその大体を得たのだ」

と云ったそうである。

宗矩が老病重かった日、家光はわざわざその家に行って病気を見舞われたことがある、正保三年三月、柳生が亡くなった時は、その頃にためしのない贈位の恩典があって、従四位下に叙せられた、宗矩が死んで後、家光は事に触れては、

「宗矩が世にあらば尋ね問うべきを」

と、歎いて絶えずあとを慕っていたということである。

（常山紀談）

柳生但馬守宗矩は父但馬守宗厳にも勝れる剣術の上手であった、徳川三代将軍家光の師範となり一万五千石にまでのぼった人であるが、武芸のみならず才智も勝れ政道にも通じていた。

或時、この宗矩、稚児小姓に刀を持たせて庭の桜の盛んに咲いたのを余念なく見物していたが、その時、稚児小姓が心の中で思うよう、

「我が殿様が如何に天下の名人でおいで遊ばそうとも、こうして余念なく花に見とれておいでなさる処をこの刀で後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com